和名倉百年の森

2026
4.1
51号

wanagura hyakunen no mori　NPO法人百年の森づくりの会

公益信託富士フイルム・グリーンファンドの助成により本会報を発行します

巻頭言……1 ／ 総会・記念講演会……2－5 ／ 公開講座……6－8
第18回通常総会……8 ／ 和名倉山森づくり……9 ／ 会員だより……10
三峰分校……11 ／ 長瀞宝登山の森づくり……11 ／ 年間スケジュール……12

「植物の知恵」に注目しています

理事長　高岡正彦

図書館で「地球を救う植物のすごい知恵」（中西友子著日経サイエンス社発行）を見つけた。タイトルに惹きつけられた。ブックカバーのイラストも興味を掻き立てられた。

「まえがき」は、「地球の植物の全重量は1兆トン。動物の百倍にも達する量です。」から始まる。「植物が生み出す化学物は、広範な生産物として私たちに多大な恩恵をもたらす。植物の活動をよく知ることは、私たちが直面する困難を乗り越えるための知恵を得ることにつながる。」と述べられている。

本文は、結構学術的で難解のところがあるが、環境問題を考えるにあたりとても参考になる。

動けない植物は環境に寄り添って生きるしかない。しかし、およそ5億年前に、植物は海から陸へ移ってきた。それは、海水中より空気中の方に二酸化炭素が多く存在したことや、オゾン層ができ陸でも紫外線の量が減ったことなどによるという諸説があるという。そして、陸上に上がった植物は、土壌内の元素を吸収して進化しているという、粘土質土壌に適応した植物はカルシウム濃度が高く、石膏質の砂漠土壌で生きた植物はマンガンやコバルトなどの濃度が高いという。ヘビノネゴザ（別名金気草カネケグサ）は銅・亜鉛・カドミウム・リンを超集積することが知られ、鉱脈探しに役立だったと考えられている。

最終8章で、植物経済学から見た役割が語られている。14世紀には砂糖、綿を栽培し利益を上げるようになり、15～16世紀にはポルトガル、スペインが、そして18世紀にはフランスがサトウキビ農園を植民地に開設した。植物の独占を競い合い、植物が経済における「武器」となった。さらに、とうもろこし、ジャガイモの栽培が、人口増加に大きく寄与したと語られている。ヨーロッパでは植物資源を探し出し、栽培法を研究するために、各地に「植物園」が建設された。日本の「植物園」には、観賞、憩いの場というイメージが一般的であるのと比べて大きな違いがある。

「あとがき」にも、植物の性質だけでなく、その生き様、活動を知ることで、これから人間が生きていくうえでの、大きな知恵を得ることに繋がることを求めている。

次に、新聞で「植物哲学　自然と人のよりよい付き合い方」（著川原伸晃）が紹介されていた。『植物はか弱い？とんでもない、人間を凌駕した「超越的生命」だと主張する。長寿命、増殖、移動などの特性と問題解決能力を備えた「知性」の持ち主である。』と語っている。園芸家である著者は、「自然の自然さとは」を、悩んでいたとのことだ。すぐに注文したが、アマゾンにも、書店にも、発行元にも在庫がないとのことだった。興味が尽きない。皆様もご一読を。

さて、埼玉県立川の博物館で昨年催された「埼玉の食と菌類」展で「きのこ展」を見た。きのこは植物とは、全く違う生態系だが、地球上での役割の大きさは容易にわかる。私はきのこの見た目に惹かれている。毒々しいもの、可愛らしいも、美味しそうなもの、結構目立つ姿をしている。和名倉山でもよく見つける。記念講演会で埼玉きのこ会会長のお話をいただく。さらに興味を膨らませたらと思っている。

総会・記念講演会（令和七年六月一日）

新たな森林資源の活用による「未来へつなぐ森づくり」

講師　NPO法人 秩父百年の森
副理事長　斎藤　隆

紹介いただきました斎藤です。今日は秩父百年の森の活動についてお話ししたいと思います。よろしくお願いします。

秩父百年の森は、地域の活性化も含めて「秩父を重点的に進めていきたい」という思いから、２００９年に「百年の森づくりの会」から分かれて設立しました。

なぜ分かれたのかというと、当時、内藤会長に「秩父を中心に地域振興をからめ取り組みたい」とお話ししたところ、「それなら、思いきって別の組織としてやってみたらどうですか」と勧めていただき、新たに設立することになった、という経緯です。

私が森づくりに関わり始めたきっかけは趣味の渓流釣りです。私はイワナやヤマメを釣るのが好きで、よく通っていた川があるのですが、ある時から、そこで魚がまったく釣れなくなってしまいました。不思議に思って上流へと釣り上がっていくと、目の前に広がっていたのは、全面皆伐で丸裸になった山の姿でした。木がなくなり、自然の中で複雑に保たれていたバランスが崩れ、生態系が変わってしまったことで、魚たちが住めなくなっていたのです。「どうにかしたい」「何とかできないか」そんな思いを抱いていた時に、釣り仲間の島崎武重郎さんが三峰神社で開かれていた「千年の森委員会」の会合に参加しました。

そこで、「百年の森づくりの会」初代会長の内藤勝久さんと出会い、お話を伺う中で「自分たちも森づくりに関わっていこう」と決意したのが始まりです。

秩父百年の森では、主に4つの取り組みを中心に活動しています。

・1つ目は「森林整備活動」です。

私たちの森づくりの基本は、本来の種を考慮して、地元の山から種を採り、自分たちの手で苗を育て、大きくなったらまた山に植える。国内外来種を持ち込まない、そんな森づくりを続けています。

この活動の原点となったのが、秩父の最も西にある山吹沢の県有林です。ここでの活動は、２００３年に「百年の森づくりの会」がスタートしました。上尾の武道館建設資材として全面皆伐され、小さな木まで全く無くなった県有林に毎年ブナを中心に木を植え、鹿に食べられないように保護ネットを巻いたり、植栽エリアを囲ったりしてきました。

2003年山吹沢での植林のスタート

2025年の同じ場所の樹木の様子

こちらの写真が、植樹当初の様子と、それから20年後の現在の様子です。

同じ場所とは思えないほど、立派な森に成長しました。残念なことは私たちが手を掛けられなかった上部エリアは、未だに木が育たずに土肌がむき出しな状態が続いていることです。

２００９年以降は山吹沢の活動は「秩父百年の森」が引き継ぎ、現在まで山づくりを続けています。以前は、山吹沢のシンボルでもある岩山がはっきり見えていたのですが、今年訪ねたときには、木々が成長してすっかり隠れていました。それだけ森が豊かに育った証だと思います。本当に、いい山になったと実感しています。

秩父百年の森では、ふたば幼稚園の園児さんたちと〝子どもと育つ森づくり〟を進めています。この森づくりは、もう15年になります。年少時にドングリやカエデなどの種を牛乳パックを利用したポットに植え付け、年中時に傷んだポットを交換、年長時の卒園前に山で植樹する。子どもたちが植えた木々は、今では大きく育って森になっています。

カエデ樹液プロジェクト活動に関連した活動で、スギやヒノキの人工林を間伐した跡地へカエデを植樹して針広混交林にする活動です。カエデが育てば樹液を採取する「伐らない林業」となります。スギやヒノキは付加価値がつく大径木と育ち「伐る林業」、この「伐らない林業」と「伐る林業」の複合化を進め「未来へつなぐ森づくり」目指しています。

・2つ目の取り組みは、「森と街をつなぐ」活動です。

山と里、そして街の人たちをつなげることを目的に、山里街交流活動としてエコツアーや森林観察会などを行っています。以前は、森林観察会を一般公募で実施していたのですが、大人数が集まると旅行業法に抵触する可能性があると指摘を受けま

した。そのため現在は、会員を対象にした少人数・不定期の開催としています。

一方、エコツアーについては、メンバーの一人である井原さんが旅行業法に基づく資格を取得し、彼女の会社として正式に実施しています。秩父百年の森は、その活動をサポートする形で関わっています。

・3つ目の取り組みは、環境教育の支援活動です。

夏休みには「森林教室」や「森の恵み体験学習」などを開催し、子どもたちに森の大切さを実際に体験しながら学んでもらう活動を行っています。

また、「森を語ろう」というタイトルでシンポジウムも開催しています。第1回のシンポジウムでは、「森は海の恋人」で知られる気仙沼の畠山重篤さんをお招きし、貴重なお話を伺いました。

・4つ目の取り組みが、本日のテーマである地域活性化活動です。

これらの取り組みは利潤を生む活動です。しかし我々NPOには直接利益の配分はありません。森林保全活動の一つの手段としての取り組みです。

山の恵みを里で加工し、街で販売することで、街から里、そして山へと経済の循環を生み出し、山にお金が還元される仕組みをつくる。そうした流れによって、森の保全につなげていくことを目指しています。

ここでは、まず「カエデ樹液プロジェクト」と「キハダプロジェクト」についてお話しします。

【林業の現状】

まず、林業の現状ですが、非常に厳しい状況にあります。たとえばスギの場合、市場価格は1立方メートルあたり約7300円。一方で、間伐・搬出・運搬などの経費は約9300円かかります。つまり、1本あたり2000円の赤字となり、その差額を税金や補助金で補っているのが実情です。スギだけの山では採算がとれません。

秩父の森林率は87%、そのうち人工林率は47%です。埼玉県全体の森林率は全国でも下から4番目で、なんと東京都よりも低い。一番低いのは大阪府です。

《カエデ樹液プロジェクト》

林業を少しでも元気にするために目をつけたのが、カエデの樹液です。秩父には多くのカエデが自生しています。日本に27種類あるとされるカエデのうち、秩父には20種類あります。1980年代に大分県で始まった「一村一品運動」からヒントを得て、「秩父でも地域の資源を活かしたものづくりができないか」と考え、カエデの樹液を使ったお菓子づくりに挑戦することになりました。そのカエデの樹液を煮詰めたものがメープルシロップです。この樹液を利用してお菓子を作り、販売していくことを提案しました。

【「カエデ」と「モミジ」の違い】

ここで少し豆知識を。「カエデ」と「モミジ」は何が違うのか？ 実は語源が異なるだけで、植物学的な違いはありません。

「カエデ」は葉の形がカエルの手に似ていることから、「カエル手（カエデ）」と呼ばれるようになりました。

「モミジ」は、秋に色づく様子を表す動詞「もみ出づ」から来ています。

カエデの特徴は、葉や枝が対になってつき、種にプロペラのような翼があることです。

代表的な種類に「イロハモミジ」があり、葉の切れ込みは〝イロハニホヘト〟の7つに数えられます。葉柄には溝があり、毛がないのが特徴です。

・メグスリノキについて

「メグスリノキ（目薬の木）」の紅葉は、独特のサーモンピンク色でとても美しい木です。葉は長楕円形の3枚が組み合わさっています。

戦国武将・黒田官兵衛の祖父、黒田重隆がこの木の薬を売って財を築いたと伝えられています。古くから肝臓系の目の病に効くといわれ、現在では緑内障の予防効果についても研究が進められています。ただし、この木は種がつきにくく発芽率も低いため、増やすのが難しい。現在、東京大学秩父演習林と共同で、20種類のカエデ見本林をつくる計画を進めていますが、メグスリノキの種がなかなか採れずに苦労しています。

・紅葉の仕組み

では、なぜ葉は色づくのでしょうか。赤くなるのを「紅葉（こうよう）」、黄色くなるのを「黄葉（こうよう）」といいますが、実はその色づきの仕組みは異なります。

秋になって気温が下がり、日照時間が短くなると、葉の中のクロロフィル（緑色の色素）が分解されます。葉の付け根には「離層」という膜ができ、水や養分の供給が止まり、葉で作られた栄養分が葉内にたまります。その過程で、糖とタンパク質が結合してアントシアニン（赤色）が生じると紅葉に、カロテノイド（黄色色素）が残ると黄葉になります。どちらも紫外線から葉を守る働きがあります。

秩父でも見られるハウチワカエデは、葉が大きく鮮やかな赤に染まり、林の中でもひときわ目を引きます。

〇カエデの調査と樹液の性質

まず、カエデの基礎調査を行いました。樹種・直径・樹高といった個体情報に加え、緯度・経度・標高・傾斜・土壌などの位置情報、そして所有者などの権利関係も調べました。さらに、気温と樹液流出量の関係を調査しました。

カエデの樹液採取風景

冬の間、島崎さんと田島さんの2人が山に泊まり込み、樹種の違いによる流出量の比較や、イタヤカエデ2本の太さの違いによる一日の変化を観測しました。その結果、昼から午後3時ごろまで、気温の上昇とともに流出量が増えることがわかりました。

カエデの樹液が出る仕組みは以下のように言われています。

冬の寒さから樹木が自分の細胞を凍らせない対策として糖分を多く作り、細胞中に蓄えて細胞内凍結を防ぎ、樹液中に溶かしておくため、糖度が高くなります。ショ糖は木の繊維を通れないため、道管部にたまります。気温が上がり、樹液が溶けると道管部の浸透圧が上昇し、木繊維部の水を押し出します。その結果、道管内の水圧が高まり、穴を開けると樹液が溢れ出す、これが樹液採取のメカニズムです。

成分分析は埼玉大学で行いました。主成分はショ糖で、果糖やブドウ糖も含まれています。中でもヒナウチワカエデはショ糖含有量が高く、非常に美味しい樹液が採れます。また、秩父産の樹液はカリウムやカルシウムなどのミネラルが豊富で、カナダ産のメープルシロップよりも多いという結果が出ています。

○樹液の活用と商品化

採取した樹液をどう活かすかを考え、最初はお菓子づくりの組織と協力していました。しかし、その後それぞれ独自の方向に進むこととなり、私たちは新たな体制を整えました。

秩父の山林を管理する大滝山林振興協議会と協力し、秩父樹液生産協同組合を設立。

樹液を新たな森林資源として生産し、秩父観光土産品協同組合（以下、土産組合）と連携して商品化する体制をととのえました。

採取地は大滝の槌打周辺、入川、両神の小森川流域、横瀬の正丸峠付近などです。かつては中津川の県有林でも採取していましたが、落石が多く危険なため、現在は休止しています。

カエデの樹液は無色透明で、糖度は1.5～2.0、ほんのり甘く、とてもきれいです。採取量は気温によって変動しますが、冷え込みの厳しい年は採取量が多く、糖度もたかく、2024年は約6トン、今年は約8トンを採取しました。すべて人力の作業です。

NHKの『あさイチ』では中津川での採取の様子が生中継されました。毎年数回テレビで取り上げられています。また、2021年からはその年の採取から煮詰めまでの工程をYouTubeで公開しています。

○海外との違いと地域連携

では、なぜカナダ産のメープルシロップは安いのか。カナダでは約200年前から国策として平地にカエデを植林し、樹液は真空ポンプを使い、パイプで直接樹液を工場へ送り、一括処理するという大量生産システムを確立しています。そのため生産効率が非常に高いのです。

一方、秩父では分散して自生しているカエデから、手作業と人力による丁寧な採取を行っています。その違いこそが、地域の特色であり、価値でもあります。

私たちは「未来へつなぐカエデの森」としてカエデの植樹を進めています。ちかい将来にはこれらのカエデから効率よく採取できる仕組みができよう動いています。

○MAPLE BASE（メープルベース）の取り組み

エコツアーでも活躍している井原さんは、もともと会社勤めをしていましたが、カエデの観察会に参加してこの活動に共感し、これまでのやり方ではダメだと会社を辞めて私たちの仲間になりました。カナダへ渡って直接学び、現在は活動をリードしてくれています。

濃縮作業は、MAPLE BASEで行っています。カナダでは、メープルシロップの作業場とカフェを兼ねた施設はシュガーハウスと呼ばれます。日本で初めてのシュガーハウスがMAPLE BASEです。

この場所はもともと閉鎖されたゴルフ場のクラブハウスでしたが、市から土産組合が借り受けリノベーションして、現在は作業場兼カフェとして活用しています。ここに集めた樹液を、カナダから輸入したエバポレーター（煮詰め機）で薪を焚いて濃縮します。糖度は66度、これはカナダの基準に準じています。メープルシロップの香りと琥珀色は、アミノ酸と糖が加熱によって反応する「メイラード反応」によって生まれます。以前、熱を加えずに濃縮したところ、甘いだけで色も香りもない味気ないシロップシロップになってしまい、ガッカリしたことがあります。

協同乳業（メイトー）さんにもご賛同いただき、秩父産メープルシロップを使用した季節限定の和メープルプリンを毎年2月から5月にかけて全国販売してくださっています。

売り上げの一部は寄付金としてNPOに還元されており、わずかずつでも積み重ねで大きな支援となっています。本当にありがたい協力です。

カエデの樹液を採取して活用する「伐らない林業」スギやヒノキの「伐る林業」を複合化した新しい形の林業を模索して持続可能な森づくりを進めています。カエデ樹液の取り組みは「伐らない林業」のモデルとして全国から視察に来られています。

《キハダプロジェクト》

「キハダ」というと、キハダマグロを思い浮かべる方もいるかもしれませんが、魚ではありません。ここで言うキハダは、ミカン科の落葉高木です。

カエデの植生調査の過程で、広葉樹林の中に多くのキハダが自生していることが分かりました。しかし、その木が無造作に切り倒され、捨てられているのを見て、「もったいない、何かに活かせないだろうか」と考え、調べてみることにしました。

キハダの樹皮を剥くと、内側の皮が鮮やかな黄色をしています。これが「黄膚（キハダ）」という名前の

由来です。伝統色の「黄蘗色（きはだいろ）」はこの内皮の色を指します。この内皮は薬になります。キハダの内皮を乾燥させたものを「黄檗（オウバク）」と呼び、非常に苦い薬です。「良薬口に苦し」ということわざの語源になったとも言われています。お酒を飲む前に飲むと二日酔いを防ぐ効果もあるそうです。

オウバクにはベルベリンなどのアルカロイドが含まれ、強い抗菌・抗炎症作用があります。また、柑橘系特有の苦味成分であるリモノイドも多く含まれ、こちらにも同様の作用が認められています。最近の研究では、抗がん作用も報告されています。

秩父百年の森では日本薬科大学と共同研究を行い、成分や効能の裏付けを進めています。その結果、秩父産のキハダは中国産に比べ、ベルベリンやリモノイド、ポリフェノールの含有量が圧倒的に多いことが分かりました。薬として販売する場合は価格競争で中国産に押されてしまいますが、最近は中国からの輸入が減少しており、秩父産への関心が高まっています。

キハダの収穫時期についても年間を通して調査したところ、ベルベリンの含有量が最も多いのは夏の時期だと分かりました。虫が葉を食べるのを防ぐため、成分を増やしているようです。

では、なぜ秩父でキハダなのか。

江戸中期に大滝の生まれの木村好八という剣術家がいました。三峰山の高雲寺で得度し、「本明院普寛」と名を改めて修験行者となり御嶽行法を完成された方です。高雲寺は現在の三峰山の北側にありましたが、明治の神仏分離で取り壊され、今はありません。三峰神社の「興雲閣」はその名残とされています。三峰神社の大きな髄神門は「仁王門」でした、安置されていた仁王像は現在、鴻巣のお寺にあるそうです。

普寛上人は木曽の御嶽山の王滝口を開いた人物でもあります。木曽王滝の村人へキハダから作られる霊薬「百草」の製法を普寛上人が伝授し、それが長野県の木曽御嶽で「百草丸」として受け継がれています。現在は長野県製薬という会社で製造されております。キハダの活用について私たちとも共同研究を進めています。

（キハダの活用）

キハダの活用についてですが、薬としての価格は依然として低く、また薬事法の制約もあって飲食物への使用は難しいのが現状です。

私たちは諦めずに試行錯誤して、キハダの苦味を活かした「森のサイダー」を開発しました。カボスを加えてやさしい甘さに仕上げ、甘さはカロリーを抑えるために植物由来のステビアを使用しています。販売までには3年を要しました。薬事法などの関係で審査がとても厳しかったのです。今では、長野県御嶽山の麓で特に人気があります。

次に「ボディソープ」です。キハダの強い抗菌・抗炎症作用と保湿成分を活かし、医薬部外品として商品化しました。山作業後の体臭予防や冬の乾燥によるかゆみを防ぐことを目的に開発したところ、「水虫が治った」「ふけやかゆみに効く」「ニキビが良くなった」などの声をいただきました。補助金を活用して開発し販売もしましたが、価格は少し高めです。

三つ目は「ノンアルコールビール」です。キハダの苦味とホップの苦味を組み合わせた、すっきりとした味わいに仕上げました。特許の関係もあり、ビールメーカーとも相談を重ねました。中身は炭酸飲料ですが、「ビール」という名称のため一般店舗では販売できず、秩父酒販協同組合を通じて流通しています。味の評判は良いのですが、普及にはまだこれからというところです。

《第3のみつ》

秩父農工科学高校と埼玉大学との共同研究で、カエデ樹液やリンゴ果汁などを餌としてミツバチに与えると、これまでにない新しい「ミツ」ができることが分かりました。これを「第3のみつ」と名付けました。同時に埼玉県（秩父農工科学高校）と埼玉大学と我々NPOで特許を取得しました。

「第3のみつ」とは何か。はちみつは国際規格で2種類に分類されています。ひとつは植物の花の蜜に由来する「花はちみつ」、もうひとつは植物の樹液を吸う昆虫の代謝物に由来する「甘露はちみつ」です。このどちらにも当てはまらないため、「第3のみつ」と名づけ、製法特許も取得しました。

日本の蜂蜜の約95％は輸入で、ほとんどが中国産です。実際には糖度の低い真っ黒い蜜を煮詰めて色を調整しているものも多いといわれています。

「第3のみつ」は、果糖・ブドウ糖などの糖成分の割合や含水量は通常の蜂蜜とほぼ同じですが、カリウムやカルシウムなどのミネラル含有量が多いのが特徴です。

販売は前記した井原さんが立ち上げたTAP & SAPという会社が「秘蜜」というブランド名で販売しており、秩父のふるさと納税の返礼品にも採用されています。

未来へつなぐ森づくり

「みんなでカエデを植えよう。」

カエデのお菓子が売れれば、カエデの森が育つ。山の人と街の人が手を取り合い、みんなで森を育てる。カエデの森が紅葉で美しく色づけば、それが観光地になり、お土産としてカエデのお菓子が売れる。街から人が訪れ、森が豊かになる。そんな循環を育てていきたいと考えています。

こうした取り組みを通じて、山・里・街が連携し、林業と地域の活性化を進めながら、持続可能な森づくりを目指す「未来へつなぐ森づくり」に取り組んでいます。

ご清聴、ありがとうございました。

（文責　事務局）

【本講演は、公益財団法人サイサン環境保全基金の助成を受けています】

令和7年11月9日第29回公開講座

大宮公園歴史探訪

本多静六博士を顕彰する会
顧　問　渋谷　克美

大宮公園は氷川神社の境内地の一部を官有地化して、明治18年に開設した県営公園です。本多静六は大正9年に埼玉県からの依頼を受け、翌年「埼玉県氷川公園改良計画」を発表しました。開園以来、時代の要請に応えて拡張や整備が続けられ、現在に至るまで桜の名所やスポーツの殿堂としての役割を担ってきました。今日は今年開園140年を迎えた大宮公園の歴史の一端を紹介したいと思います。

【①開園初期の氷川公園】

日本の公園の歴史を見ますと明治6年に太政官布達第16号により我が国で初めて公園が誕生します。埼玉県では翌年浦和の調神社が埼玉県初の公園に指定されます。明治16年には高崎線が開通され、その時はまだ大宮駅はありませんでした。地元有志らが危機感を覚え、明治16年頃から地元有志らにより駅の開設と併せて、公園の設置運動が始まり、翌年17年に大宮宿総代ら43名による公園設置の請願書が埼玉県に出されます。こうした運動により明治18年3月に大宮駅が開業され、同年9月に氷川公園が開園されました。

最初の公園設計は、庭師・佐々木可村（大隈会館庭園・渋沢栄一飛鳥山庭園・靖国神社神池庭園などを作庭）の案を基にすすめられたようです。

しかし開園当時から財政難が続き、運営費を確保するため公園地の一番良い場所を旅館や料亭、茶店などに貸し出すようになります。

また、県では来園者誘致のためパンフレット等を作成して関係機関に周知することで利用者増を図りましたが、公園への失望や不満の声が高まるとともに、財政難のため設備の維持管理が思うように出来なくなります。

こうした経緯を経て、本多静六に設計を依頼することになります。

本多静六は数回にわたる綿密な実地調査を行い、大正10年「埼玉県氷川公園改良計画」を作成します。この改良計画が現在の大宮公園の基本構想となっていて、理想的な公園としてすべての要素がつまっており、本多にとっても集大成的な公園といえるものです。それでは、大宮公園の歴史を辿って行きたいと思います。

【②含翠楼（がんすいろう）跡地】

旧公園事務所のあったこの場所は、明治18年公園開設当初に建設された「含翠楼」が建っていた場所です。

木造2階建て10坪の亭舎は、公園の管理機能を有し、茶の湯や歌の会、宴会場として一般に公開されました。建築費は当時の見積書によると597円52銭とあります。この経費は県予算外の機密費で賄われたそうです。「含翠楼」は、昭和39年に取り壊され、跡地には一時、公園事務所が建てられましたが、野球場の新築に伴い、平成2年8月に現在の場所に建て替えられています。残されている灯篭や井戸石などの庭園の遺構が当時の面影を伝えています。

【③大宮公園野球場】

大宮公園の現在の野球場は、平成

4年に国際規格の球場に建て替えられていますが、旧大宮公園野球場は、当時の明治大学野球部岡田源三郎監督の意見を聞き、明治神宮球場をモデルに造られました。竣工記念試合となったのは昭和9年11月29日の日米親善野球で米軍チームにはベーブルースやルー・ゲーリックが出場しています。また、昭和28年8月1日に行われた高校の関東大会、熊谷高校対佐倉一校の試合では長嶋茂雄さんがバックスクリーンに特大のホームランを打ち話題になりました。

【④氷川公園と明治の文豪たち】

開園当時の氷川公園は、松や雑木林に覆われた武蔵野の面影が色濃く残った地で、東京の奥座敷として、ホタル狩りや秋の虫聴き、萩の花やススキ観賞などの風流が人気を呼び多くの文人墨客が訪れたようです。

現在の小動物園から児童遊園地にかけての一帯は、高級料亭「万松楼(ばんしょうろう)」があった場所で、俳人・正岡子規の随筆「墨汁一滴」の中に、明治24年9月当時東京帝国大学の学生であった子規が試験勉強のため、この料亭を訪れ、この地を大変気に入り、友人夏目漱石を呼び寄せたとの下りが書かれています。

樋口一葉や永井荷風、国木田独歩、森鴎外、正宗白鳥、与謝野鉄幹らが訪れたり作品の舞台としています。

太宰治は、「斜陽」の出版で人気が出た頃、東京三鷹に住んでいましたが、ファンが殺到して執筆に支障があるという事由で、筑摩書房が氷川公園の近くに宿を手配して、「人間失格」を完成させたという逸話もあります。

【⑤児童遊園とスポーツランド】

大宮公園の児童遊園は、料亭「万松楼」が立ち退いた跡地に整備され、昭和8年2月に開園しました。当初は本多静六の改良計画に基づく、児童の運動施設のための小運動場としての位置づけでしたが、昭和25年4月に飛行塔を備えたスポーツランドが開設されました。当時の額にして約2000万円で購入したものです。

現在の飛行塔は平成17年に改修されたものです。埼玉県スポーツ協会が直営収益事業として管理運営しています。

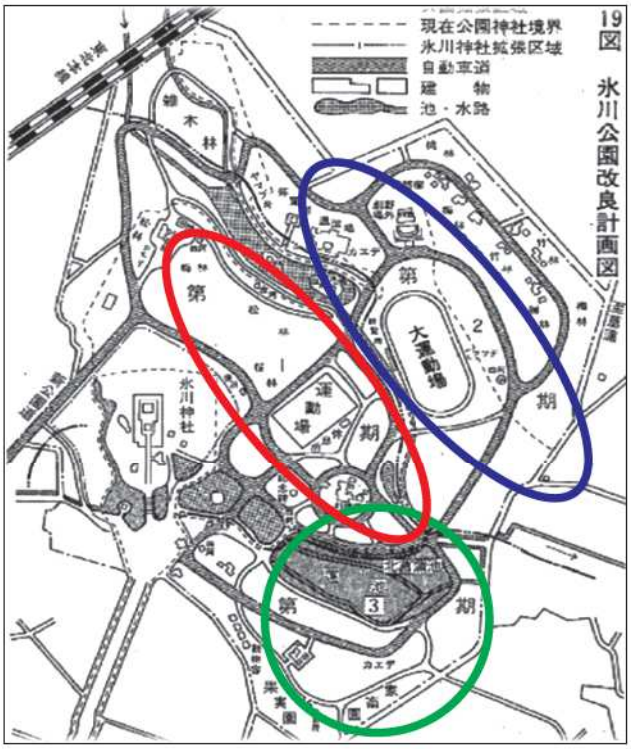
【⑥小動物園開設秘話】

本多静六の改良計画では、「家畜園」「動物舎」とあったものの、すぐには実現しませんでした。整備のきっかけは、昭和26年当時の大澤雄一埼玉県知事が北海道の産業視察をした際、埼玉県からの開拓団の村「秩父郷」で、知事が見た子熊が帰郷後鍊とともに知事公館に送られてきました。この子熊を公園で引き取ったのが、動物園の始まりです。開園時、獣舎6棟に猿、鶴、ペリカン、小鴨、オームなどが展示され、開園式当日は20万人の人出で賑わったそうです。現在は約60種、300点の動物が展示されています。小動物や鳥類が主体の動物園ですが、猛獣のクマが展示されているのはこのような経緯によるものです。

【⑦大宮公園の赤松と桜】

現在、大宮公園を代表する風景は赤松の古木と染井吉野700本が混在する樹林ですが、開園当初はハギやススキが茂る赤松林でした。正岡子規は、河東碧梧桐宛の書簡に、「松林の間に秋草がこぼれ、殊に萩の名所で、一面萩と薄の広い原野もある」と当時の公園の秋景を記しています。

桜は、開園当時には既に植えられていたことが氷川神社境内にある「県令櫻の碑」で知ることができます。桜はその後、本多静六の公園改良計画でも取り上げられ、大正末期以降松林の合間に積極的に植えられて、赤松と染井吉野の特徴ある景観が形成されました。この区域が第1期改良計画の中心地になります。平成2年には「さくら100選の地」に選定されています。



19図　氷川公園改良計画図

現在これだけ素晴らしい景観を保っているのは、地元のボランティアの方々が整備しているお陰です。2か月に1回、害虫駆除や土壌改良、ひこばえの枝打ちや除伐などをされているそうです。

【⑧⑨氷川公園改良計画】

本多静六の氷川公園改良計画の基本方針は、①当初の公園面積から広さを4倍に拡張する、②経費は県費と大宮町からの寄付金で賄う、③3区域・3期に分けて数十年かけて整備するというものでした。

第1期計画は、①神社地と公園地を明確に区分する、②料亭等を移転させ児童遊園地を整備、③桜林、松林、芝生を配した公園の中心的景観を創る。

第2期計画は、①舟遊池の整備、②散策路、雑木林等の造成、③料亭の移転、④観客席付き大運動場（双輪場・陸上競技場）の整備、⑤野外劇場（演劇・演奏会・講演会等）を整備する。

第3期計画は、現在のサッカー場等のある区域ですが、①花菖蒲・蓮の栽培、

②果樹園の整備、③家畜舎、動物舎の整備、④茶店を設け果物や大宮名物を販売・飲食をさせるというもので、現在売店は6個所ありますが、いずれも昭和レトロっぽい所が魅力です。

本多静六は、公園の目的として、①心身の健康を第一に、②地域経済の発展と文化の振興、③日本の近代化のためにも公園の整備が必要であるとしています。特に本多は、各地の公園設計の中でも地域の特産品を創り出して地域経済を活性化させることも強く提言しています。

【⑩幻のオリンピックと陸上競技場・双輪場建設】

この辺りが、第2期改良計画の区域で、「大運動場」は陸上競技場という名称で昭和5年に着工されながら、予算等の都合で建設が中断されていました。そうした中、昭和11年に第12回東京オリンピック大会の開催（昭和15年開催予定）が決定したことを受けて、埼玉県では自転車競技種目の誘致を目的に、陸上競技場兼双輪場という形で整備を再開し、陸上競技場の外側に1周500m、最大傾斜40％のバンクを設置する工事が始められました。その後、東京大会は戦争のため中止となりますが、昭和14年に双輪場が、翌15年に陸上競技場が竣工し、昭和24年には東日本初となる第1回大宮競輪が開催されました。

【⑪公園拡張に伴う湿地埋立工事】

この区域は高鼻台地の間に入り込む見沼の低湿地で、埋め立て工事は難工事で、盛土については、国鉄大宮工場から出る、排水にも有効な石炭殻を無償で大量に提供され工事が進められたそうです。

【⑫遊園地ホテル】

この場所に大正10年に開業したホテルがあり、その名残がこの旧正門です。「大宮公園遊園地ホテル」は瀟洒な西洋風の建物で、戦後は一時駐留軍のルーフガーデン（屋上を利用した庭園）となりましたが、後に埼玉県自転車振興会が買収して競輪選手宿舎兼事務所として使用されました。

公園のことを当時遊園地と言っていましたが、特に外国人が多く訪れたところは遊園地と言ったようです。

当時このホテルは埼玉県内で一番建物が大きくグレードも高かったようで、宿泊料金は5円、今の約3万円。当時帝国ホテルが7円、丸の内ホテルが5円です。建物は昭和42年に取り壊され、跡地には昭和46年に埼玉県誕生100年を記念して埼玉百年の森が整備されました。

池に面した売店は出来た当時はログハウス風の建物で、景観に溶け込むような配慮がされていたようです。

舟遊池は平成12年に貸しボートが一時終了しましたが、その後2回かいぼりして水質浄化を図り、去年貸しボートが復活しました。

以上で本日の歴史探訪を終わりにしたいと思います。（文責　事務局）

【本公開講座は、公益財団法人サイサン環境保全基金の助成を受けています】

令和七年度

第一八回通常総会開催

NPO法人百年の森づくりの会の令和七年度第一八回通常総会が、六月一日（日）埼玉会館において開催されました。

当日は、令和六年度事業報告・収支決算案、令和七年度事業計画・収支予算案を審議いただき満場一致で原案通り承認されました。

また、任期満了に伴い役員の選任案について、左記役員を再任することを提案し、満場一致で原案通り承認されました。

役員は、以下の通りです（敬称略）

理事長　高岡　正彦
副理事長　東　克明・内藤　健三
常務理事　守谷　裕之・吉田　兼紀
小林　公彦
理事　浅野　純次・大熊　光治
石関　明稔
監事　宇津木正晴・玉熊　英一
顧問　坂本　和穂

これからも宜しくお願いいたします。

続いて、定款変更案として主たる事務所の変更および顧問条項の変更について提案し、満場一致で原案通り承認されました。

総会終了後『新たな森林資源の活用による「未来へつなぐ森づくり」』と題して、NPO法人秩父百年の森副理事長斎藤隆氏による記念講演会を開催しました。森林資源のカエデ樹液活用などの事例を講演いただき、成功裡のうちに終了することができました。（講演録は別途記載）

2025年度下半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当　高岡　正彦

10月25・26日　第54回ワーク

今回は、十五名（高校生八名）も集まった。そこで倒れてしまった鹿よけネットを回収する作業をすることにした。鹿よけネットは植林し始めた二十五年前から設置していた。植林した苗を守ると同時に、実生苗の保護にもなると考えていた。しかし、設置したネットは2、3年で雪や風のせいで倒れてしまった。その後は、個々の苗にネットをつけるようにしていた。

高校生の八名中七名は1年生で初ワークである。さらに、仁田小屋までの登山道は、普通とは違い整備されていない悪路である。とても苦戦していた。

現場（犬ブナ平）に着いて、作業となると、皆で協力して後片付け始めた。数の力は偉大である。

2時間ほどの作業だったが、見違えるようになった。その後は、荷下ろしで頑張ってもらった。

仁田小屋のトレイルカメラには、鹿、狐、テン？　そして今回はサルも写っていた。小屋の裏の斜面で何か摘んで食べていた。

今年（2025年）は熊の話題が毎日のように続いた。熊の好物のブナの実が凶作だったことも要因の一つと言われている。一理あると思うが、そもそも木の実をつける広葉樹を減らし過ぎたのではなかろうか。和名倉山も昭和39年の山火事後、唐松を40万本植えたと言われている。当時は、成長が早いと言われる唐松を選んだのかもしれないが、今、見直す時期ではなかろうか。我々も水源林としてだけでなく、多様性の復元としてのブナをはじめとする広葉樹の植林を進めたい。

2025年度　和名倉山森づくり事業記録

4・4	トレイルカメラデータ回収（1名）
4・5	小屋整備（3名）
5・10	トレイルカメラデータ回収（1名）
5・24～25	ワーク雨天中止
9・9	トレイルカメラデータ回収（2名）
9・13～15	大洞川惣小屋谷探索会（4名）
10・11～13	仙波尾根探索小屋案内（4名）
10・25～26	第54回ワーク（15名）
12・1～2	トレイルカメラデータ回収（1名）
12・23	小屋点検（1名）
2・21～22	トレイルカメラデータ回収（1名）

会員だより

惣小屋谷遡行記

会員　鈴木 一博

2025年９月13日～15日にわたって、惣小屋谷を詰めて和名倉山に登った記録を綴ります。

ゴルジュ帯を進む筆者

９月13日午前７時に鮫沢橋集合、高岡理事長をリーダーとして計画立案のサブリーダー東さん、クライマーの守谷さんと私の総勢４名が時間通りに集合した。ブラックデビル小屋（荒沢橋広場の最近の小屋の呼称）まで各々自転車で快走。ブラックデビル小屋に自転車をデポし入渓地点の大洞林道終点を目指して歩行開始。途中仙波尾根下降点手前の大崩落地を越えるのに相当難儀するも無事通過。

午前10時、大洞林道終点に到着。各自装備を調え10時30分入渓、クライマーの守谷さん先頭で遡行を開始。水量多く昨年の遡行とは大分勝手が違うが、気持ちが高ぶりついつい先頭の守谷さんを追い越して先に進んでしまう。昨年、アクシデントで撤退した地点を通過し昼12時には幕営適地に到着。

幕営地では、前日の雨で湿った薪に中々火が付かず、東サブリーダーと守谷さん悪戦苦闘。ようやく火が付くと雨が降り出したが、ツエルトをタープ代わりにして宴会。四方山話にあっという間に日が暮れて、午後８時には就寝。

９月14日午前５時40分、日の出とともに遡行再開。今日も水量が多い。午前７時、ゴルジュ帯に突入、ザイルで確保しつつ約２時間掛けて惣小屋谷核心部の二葉瀑を高巻きで越える。ザイルワークど素人の私は、正直、生きた心地がしない程に恐ろしかった。

山頂での４人

核心部を越えると一部高巻きはあったものの平和な遡行が続き、次第に水量も減り、随所にトリカブトの花が咲いていた。午後１時、いよいよ沢ノ流れが伏流し脱渓が近づく。枯れ窪を詰めて山と高原地図に記載のある水場に出る。

午後２時30分、沢装備を解除し、午後３時、和名倉山頂へ山頂では和名倉沢を遡行してきたという女性２人組と歓談後仁田小屋を目指して下山開始。疲労から足取りは重く仁田小屋ノ頭にて日没となり、ランドマークとなるイナバウアーが見付けられず難儀するも予めスマートフォンにダウンロードしたルート図とGPSを照合しながら尾根を下降し、仁田小屋へ続く作業道に辿り付く。午後10時、這う這うの体で仁田小屋到着、薪ストーブに火を入れて何とも言えない達成感と充足感を味わう。

９月15日、午前８時に仁田小屋出発。ブラックデビル小屋にデポした自転車を回収し午前10時に鮫沢橋に戻る。

以上、惣小屋谷の遡行記録でした。「不遇の山」とも呼ばれる和名倉山ですが、沢からその懐に飛び込むことで、和名倉山の持つ真の大きさ深さを全身で感じる充実の山行となりました。こんな素晴らしい体験をさせてくださった高岡さん、東さん、守谷さんには感謝しかありません。本当にありがとうございました。

旧三峰分校の整備と活用

●分校の整備　2025年夏の子供達の「三峰森の集い」（会報50号、参照）の後、分校の整備に取り組んでいます。９／20～23「第５回三峰森の集い（分校整備ワーク）」を延べ11名で毛布の日干し・清掃・片付け等を行ないました。その後も消防設備・電気設備の点検・補修を続け、３／20～23「第６回三峰森の集い（分校整備ワーク）」で床・ガラス窓の補修を行う（執筆時、予定）。今後も使いやすいよう整備を続けます。

●分校の活用　2025年度は百年の森づくりの会が中心となる「三峰森の集い」とは別に当会が協力して他団体が“自然体験”“屋外スポーツ”等の観点から分校で４件の活動を行い、合計184名が訪れました。最大は埼玉県高等学校総合体育大会登山（女子、一般）の基地としての活用で147名参加。2026年度に向けて多くの子供支援組織やＮＰＯから声が掛かり分校視察にも訪れています。

分校利用をお考えの方は事務局にご一報下さい。

校庭で毛布の日干し

2025年度　長瀞宝登山ヤマツツジ補植活動報告

今年度は、追加事業として、９月および10月にツツジ植栽箇所の充実を図るため20本ヤマツツジの補植作業を行いました。植栽箇所の穴掘り、水くれ、苗木の支えのための竹とともにヤマツツジの苗木を植栽しました。

当初（2007年）ヤマツツジとレンゲツツジをそれぞれ150本の苗木を植えましたが、下草に負けてしまい育ちが悪かった事から、2016年４月にヤマツツジ160本補植しました。毎年下草刈りを実施した結果、花つきも良くなってきました。これからも下草刈り作業を継続して行い、ツツジの花が満開に咲くことを楽しみにしています。

長瀞宝登山の森づくりを開始してから18年経過しており、これからは、「宝登山の森」を一般の方々にも楽しめるよう、作業道の整備なども検討していきたいと思っています。

2026 年度　活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局までご連絡ください

	総会・理事会	フィールド活動			その他
		和名倉	三峰分校	宝登山	
4月	■会報51号発行 ○4/12(日)　常務理事会			○宝登山　下草刈り作業 日時：4/12(日) 集合：9:00/長瀞 野澤さん宅駐車場	
5月	●5/18(月)　理事会 場所：さいたま市市民活動サポートセンター	○第55回和名倉山ワーク 日時：5/23(土)～5/24(日) 集合：8:30/西武秩父駅		○宝登山　下草刈り作業 日時：5/17(日) 集合：9:00/長瀞 野澤さん宅駐車場	○福島県田村市植林状況調査 日時：5/10(日)～11(月)
6月	■第19回通常総会・記念講演会 日時：6/14(日)　午後2時00分から 場所：埼玉会館 13:30　開場 14:00～14:45　第19回通常総会 15:00～15:30　スライド（活動報告） 15:30～17:00　記念講演会 17:00～18:00　意見交換会 ○6/7(日)　常務理事会			○宝登山　下草刈り作業 日時：6/7(日) 集合：9:00/長瀞 野澤さん宅駐車場	
7月			○第7回三峰森の集い 日時：7/18(土)～20(月)/旧三峰分校 ○第8回三峰森の集い 日時：7/30(木)～8/1(土)/旧三峰分校	○宝登山　下草刈り作業 日時：7/12(日) 集合：9:00/長瀞 野澤さん宅駐車場	
8月			○第9回三峰森の集い 日時：8/8(土)～8/10(月)/旧三峰分校 ○第10回三峰森の集い 日時：未定/旧三峰分校 ○第11回三峰森の集い 日時：8/25(火)～8/27(木)/旧三峰分校		
9月	○9/27(日)　常務理事会			○宝登山　下草刈り作業 日時：9/13(日) 集合：9:00/宝登山 ロープウェイ駐車場近く広場	
10月	■会報52号発行	○第56回和名倉山ワーク 日時：10/24(土)～10/25(日) 集合：8:30/西武秩父駅	○第12回三峰森の集い 分校整備 日時：10/10(土)～10/12(月)/旧三峰分校	○宝登山　補植作業 日時：10/18(日) 集合：9:00/長瀞 野澤さん宅駐車場	
11月	●11/16(月)　理事会 場所：さいたま市市民活動サポートセンター				○公開講座 日時：11/8(日) 会場：未定
12月	○12/21(月)　常務理事会				
1月					
2月	○2/15(月)　常務理事会				
3月	○3/28(日)　常務理事会				

和名倉百年の森　第51号　2026年4月1日発行
発行者：ＮＰＯ法人百年の森づくりの会　高岡　正彦

ＮＰＯ法人百年の森づくりの会事務局
〒336-0015　さいたま市南区太田窪2034-1
TEL　080-6567-2152
http://www.100nen-forest.org/　e-mail：info@100nen-forest.org